



Title	先天性胆道拡張症の病理組織学的研究：とくに胆道内膵液逆流現象との関連について
Author(s)	大口, 善郎
Citation	大阪大学, 1986, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/35030
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed 大阪大学の博士論文について https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed をご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名・(本籍)	おお 大	ぐち 口	よし 善	ろう 郎
学位の種類	医	学	博	士
学位記番号	第	7 1 1 6	号	
学位授与の日付	昭和 61 年 2 月 27 日			
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 2 項該当			
学位論文題目	先天性胆道拡張症の病理組織学的研究 —とくに胆道内膵液逆流現象との関連について—			
論文審査委員	(主査) 教授	川島 康生		
	(副査) 教授	森 武貞	教授	岡田 正

論 文 内 容 の 要 旨

(目 的)

先天性胆道拡張症の成因は明かでない。最近本症に膵管・胆道合流部の形態異常(膵管胆道合流異常)がきわめて高率に合併していることが注目されている。本症の臨床症状発現には膵管胆道合流異常の存在に伴う胆管・膵管内への膵液・胆汁の相互逆流現象が関与していると考えられているが、これにより胆道壁にいかなる変化がもたらされているのかは明かでない。本研究では本症胆道壁に観察される病理組織所見を臨床像との兼ね合いにおいて検討し、更に成犬に胆道内膵液持続流入モデルを作成して胆道壁にいかなる変化が観察されるかを検討した。

(方法ならびに成績)

1. 臨床的研究

手術時総胆管を切除した本症40例(嚢腫型31例,円柱型9例)を対象とした。尚これを手術時年齢別にみると小児29例(1か月~13歳),成人11例(21~59歳)であった。摘出標本をFormalinにて固定,Paraffin包埋,各種染色をおこない観察した。また臨床的事項として腹痛,黄疸,腹部腫瘤の有無等の臨床症状,手術時採取した胆管内胆汁中アマラーゼ値,術前の血液生化学的検査値等につき検討した。

(成績)総胆管壁は粘膜上皮層の剥奪傾向が強かった。また上皮欠損部位に慢性炎症性細胞浸潤と共に腺腔形成を示す症例がみられ,その程度は少ないものから多いものまで様々であった。腺細胞は全例共PAS, Alcian blueに染色性を認めた。線維層は総じて肥厚を示し,様々な程度の膠原線維の増殖がみられた。壁内胆管腺は症例により殆ど認められないものから多数存在するものまでみられた。

すなわち本症胆道壁は①粘膜上皮下あるいは線維層内に慢性炎症性細胞浸潤を伴い腺腔構造の形成が

みられこれが様々な程度に発達したもので、および②全体として膠原線維の発達が著明なものの2つが相俟って特徴的な組織像を形成していた。

そこで前者の所見が認められるもの（以下腺腔形成型：23例）と後者の所見のみが著しいもの（以下線維化型：17例）の2者に分類して臨床像との関係につき検討した。嚢腫型胆道拡張症例には腺腔形成型、線維化型の双方がみられ、前者の割合は年齢が経るにつれて増加しかつ高度となる傾向にあった。円柱型胆道拡張症例には腺腔形成型のみがみられた。臨床症状では腹痛（+）の症例には腺腔形成型が（22/26）、黄疸（+）の症例には線維化型が（11/15）それぞれ有意に多かった（ $P = 2.39 \times 10^{-6}$ ， $P = 3.01 \times 10^{-3}$ ）。胆汁中アミラーゼ値は腺腔形成型では $24924 \pm 23359 \text{ SU/dl}$ （ $N=21$ ）で、線維化型（ 5955 ± 7211 ； $N=13$ ）に比べ有意に高値であり、術前最高総ビリルビン値、アルカリフォスファターゼ値は線維化型でそれぞれ $5.93 \pm 6.08 \text{ mg/dl}$ ， $54.4 \pm 22.3 \text{ KAU}$ （ $N=16$ ）で腺腔形成型（ 1.94 ± 2.37 ， 25.5 ± 17.9 ， $N=23$ ）に比べ有意に高値であった（ $P < 0.05$ ， 0.01 ）。

2. 実験的研究

雑種成犬26頭を用いた。10頭に対しては全膵液が胆嚢より総胆管を経由して十二指腸へ排出されるような実験モデルを作成し、他の16頭は対照とした。術後25—41日後開腹し、臨床例とほぼ同様の検索をおこなった。（成績）肝外胆管は円柱型に拡張し、拡張率（胆道造影における術後径/術前径）は1.0～8.2（平均 3.28 ± 2.48 ， $N=7$ ）であった。組織学的にはさきに臨床例の腺腔形成型において観察された如き大小不同の胆管腺が全周にわたって増生しているのが認められ、腺の周囲には慢性炎症性細胞浸潤が認められた。腺細胞はPAS、Alcian blueに対して全例が染色性を示した。

（総括）

1. 本症の組織像は①慢性炎症性細胞浸潤を伴った粘液腺増生ならびに②膠原線維の発達を伴った壁の肥厚という2つの組織所見が相俟って認められた。
2. 前者の所見が優位にみられる症例（腺腔形成型）には腹痛を主訴とするものが多く、胆汁中アミラーゼ値は後者の所見が優位にみられる症例（線維化型）に比べ有意に高値であった。
3. 線維化型は黄疸を主訴とするものに多く、術前の最高総ビリルビン値、アルカリフォスファターゼ値は腺腔形成型に比べ有意に高値であった。
4. 胆道内膵液持続流入モデル犬の作成により総胆管壁には臨床例と酷似した炎症性細胞浸潤を伴う粘液腺増生等の所見がみられた。
5. これらより本症胆道壁にみられる炎症性細胞浸潤を伴った粘液腺増生は胆道内への膵液逆流現象が関与することにより形成されるものと考えられた。

論文の審査結果の要旨

先天性胆道拡張症の成因は未だ明らかでない。本研究では最近注目されつつある膵管胆道合流異常の概念より、拡張胆道壁の病理組織像を腺腔形成型及び線維化型の2型に区分し、これらが本症の特徴的

な臨床像との間に明らかな関連のある事を見出した。また胆道内膵液流入実験により臨床例に酷似した病理所見が得られた。

以上本研究は、先天性胆道拡張症の胆道壁の変化における膵管胆道合流異常ならびに胆道内膵液逆流現象の意義をはじめて明らかにしたものであり、本症の病態解明、外科治療の確立に有用である。よって学位論文として価値あるものと思われる。